

2021(令和3)年6月30日 報道発表資料
[本リリース発信元] ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)



新しい音楽のかたちと出会う、新シリーズがスタート！

Sound Around 001

出演(ホスト): いまいけぷろじえくと 〈今村俊博、池田萌〉

ゲスト: 17日…長井短(演劇モデル)

18日…山下残(振付家・ダンサー)、茂山千之丞(狂言師)

トークゲスト: 佐々木敦(思想家)

2021年7月17日(土)、18日(日)

ロームシアター京都 ノースホール

[本リリースに関するお問合せ先]

ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団) 広報担当: 松本、山形

電話: 075-771-6051(9:00~17:00) FAX: 075-746-3366 E-mail: press@rohmtheatrekkyoto.jp

■企画趣旨

「音楽」や「音」を広く捉え、固定観念を覆すような音楽パフォーマンスを紹介する新シリーズです。今回は、新型コロナウイルス感染症によって、声を発することを制限された今だからこそ、「声／言葉」をテーマにしたパフォーマンスを発信します。作曲家兼パフォーマーユニット「いまいけぷろじェくと」をホストに、音楽以外のフィールドで活動する表現者をゲストに招き、それぞれの身体や声を通したパフォーマンスと、アフタートークの組合せによって、新たな音楽の楽しみ方を提案します。

■本企画のポイント

驚きあり、笑いあり！？新感覚の演奏会

古典のテキストを唱えながらコンビニスイーツを食べ続ける。「そ・ぼ・ろ」の3音を3人でひたすら連呼する。トランプをめくりながら、出たマークに合わせて即興パフォーマンスを繰り返す。これらは、「いまいけぷろじェくと」のレパートリーとなっている音楽作品の一部です。この内容だけでは、いったいどこが音楽なのか？と不思議に思われるかもしれません。「いまいけぷろじェくと」は、音楽を専門に学んできた音楽家であり、上記のような一見音楽とはかけ離れているような作品も、「作曲する」「演奏する」という行為として捉えています。アカデミックな素養も持ちながらも、五線譜に書かれた楽譜を見て、歌唱したり、楽器を奏でるのではない、音楽の固定観念をくつがえす作品を多く作曲・演奏しており、今回のテーマである「声／言葉」、そして“身体性”を意識した作品に挑戦し続けています。今回の公演のために作曲した新作の世界初演にもご注目ください。

また、思考家の**佐々木敦**をゲストに迎えてのアフタートークを通して、今回のパフォーマンスや「音楽」について考え、深める時間を設けます。

異分野の多彩なゲストが登場

音楽分野で異彩を放つ「いまいけぷろじェくと」をホストに、あえて音楽とは異なる分野の表現者をゲストに迎えます。

公演1日目のゲストは、自らを“演劇モデル”と称し、雑誌・舞台・テレビ・映画などでの幅広い活躍が注目される**長井短**（ながいみじか）。

公演2日目のゲストは、振付家・ダンサーでありながら、言葉に着目した作品も多く手がける**山下残**（やましたざん）。そして、古典作品の上演のみならず、コント公演やオペラ演出まで手掛ける狂言師の**茂山千之丞**（しげやまさんのじょう）が登場します。なお、山下残が今回「いまいけぷろじェくと」のために作曲した作品も両日披露します。

「いまいけぷろじェくと」は、これまで自身の公演でも、ダンサーや俳優などをゲストに招き、音楽家とは異なる身体を通して生まれる「音楽」への再考を試みてきました。今回のゲストたちとのパフォーマンスによって、どのような「音楽」が生まれるのか。2日間共通で演奏される作品もありますが、異なるゲストの組合せによって、また別の作品として聴こえ・見えてくることでしょう。

■「いまいけぷろじェくと」紹介コラム 「音楽」する「身体」にムリをさせること

佐々木敦

今村俊博と池田萌、二人の作曲家の頭一文字を合体させて誕生したパフォーマンス・デュオ「いまいけぷろじェくと」の公演を、私はもうけっこうな長きにわたって観続けてきた。観続けてきたのみならず、ほとんどの公演で今村君とのアフタートークを仰せつかり、彼とあれこれ話してきた。だからいうなればそれなりに勝手知ったる仲なのだが、にもかかわらず、二人のやっていることにはいまだもって謎なところが多い。

今村君も池田さんもれっきとした作曲家であり、よくは知らないがおそらくちゃんとした曲（いや、いまいけの曲だってちゃんとしているのだが）もたぶんしかるべき機会には発表しているはずである。だがいまいけ公演で披露されるのは、どれもこれも相当におかしな曲ばかりなのだ。二人はあの手この手を弄して、「作曲」の、「演奏」の、つまり「音楽」の根幹、その範疇、その定義を揺るがせようとする。しかも自ら体を張って。だが、あくまでもジョイフルに。

「現代音楽・ミーツ・パフォーミングアーツ（ダンスや演劇を含む）」的な試みは数多くある。カールハインツ・シュトックハウゼン、マウリツィオ・カーゲル、ヴィンコ・グロボカル、サルヴァトーレ・シャリーノ、etc…日本ならば現在の第一人者は池田さんが師事した三輪眞弘と今村君が師事した川島素晴だろう。ジョン・ケージやフルクサスの作品にもそういう作品が沢山ある。いまいけのやっていることが、こうした系譜に属することは間違いない。だから二人の試みを理論的に音楽史に位置付けることはじゅうぶんに可能だし、そこからあれこれ思考を紡いでいくことだって出来る。だが何と言うか、彼らの曲にはそういう生真面目な営為自体を馬鹿馬鹿しく思わせるような奇妙な過剰さがあるのだ。もしかしたら本人たちは無意識なのかもしれないが、思わず笑ってしまうような“やり過ぎ感”と、自ら体を張ってるからこそ生じる“ムリ感”が、いまいけの魅力なのである。

わかりやすい例が、今村作曲の「数える人」連作と、池田作曲の「いちご香るふんわりブッセ／うさぎのまくら クリーム金時」だろう。前者はメトロノームに合わせてスクワットなどしながら数を数える、後者はコンビニスイーツを食べながら『平家物語』などの古典の文章を暗誦する、という「曲」である。両者に共通しているのは、結果としていわばテレビ番組か YouTube のチャレンジ企画みたいになってしまっていること、果たしてやり切れるのかどうか分からないという妙なサスペンス(?)が生まれてくること、そして、なんとも言えず可笑しいこと、である。「いちご香る（以下略）」は今村君が、「数える人」が池田さんが演奏することが今のところ多い。そうするとどうしても、互いに相手に無理矢理ムリをやらせているような面白さが生まれてくる。固唾を呑んで見守りながら、私は毎回、失笑苦笑爆笑を禁じ得ない。そしてふと我に返り、ああこれは「音楽」なのだった、と思い出してまたあれこれ考え始めるのである。

(次ページへ続く)

いまいけ公演の「聴衆」は、いつのまにか「観客」にされてしまう、と言ってもいいかもしれない。通常、「作曲」された「音楽」の「演奏」は、あらかじめ書かれた譜面に従って楽器（もしくは身体）を使用することによって行われる。だが「譜面」を拡大解釈してゆき、何らかの「指示」さえあれば、それでもう一種の「作曲」なのだ、と言い張ることは出来る。この考え方に沿うと「演奏」は「実行」や「遂行」と言い換えられる。それは「実験」と呼んでもいいかもしれない。実験とは、やってみなければ結果がわからない、というものだ。もちろん、普通に譜面に書かれた曲であっても、演奏ごと、リアライズごとに、さまざまな変異が不可避免的に入り込まざるを得ないし、それこそが「音楽」の醍醐味の一つでもあるわけだが、こう考えてみると私たちがコンサートの帰りに「今日の誰某の演奏は素晴らしかった（あるいは素晴らしくなかった）」などと感想を洩らしたり、超絶技巧を要する難易度の高い曲の演奏を驚嘆しながら聴くことの延長線上に、いまいけがやっていることもあると言えるのかもしれない。

いまいけは、彼らと問題意識のベクトルを同じくする先輩作曲家たちの過去曲の再演や新作委嘱も果敢に行っている。三輪、川島、鈴木治行、松平頼暁……そればかりか、作曲家ではない、いや、音楽家でさえないダンサー／振付家の岩渕貞太にも委嘱し、彼を「身体奏法/stick」で作曲家デビューさせてしまった。度々再演されている同作は、演奏者が異様に体を張りまくらねば弾けない超難曲である。言うまでもなくコンテンポラリーダンスもまた、その進化と変化の歴史の中で「演劇」や「音楽」との交錯を経てきたジャンルだが、「身体奏法」という曲名にも示されているように、ここから浮かび上がってくるのは、いまいけの「身体」へのこだわりである。譜面に書かれただけでも理念的にはその楽曲はすでに存在しているが、それでもそのリアライズには身体が必要となる。いや、身体を要らない音楽だってあるのだが、しかしそのような音楽（たとえばコンピュータによって演算されてスピーカーから流れ出すだけの音楽）でさえ、聴取の、鑑賞の、体験の現場においては、聴衆＝観客の身体抜きには成立しない。聴く／聞くという行為は能動的でも受動的もあり得るが、いずれにせよ身体だけは消去出来ない。そんな「音楽」の「身体」性という側面にフォーカスし、そこをひたすら（少々ヘンな方向に？）増幅していった先に、いまいけがやっていること、やろうとしていることがある。

だから「体を張って」というのは極めて重要なのだ。ロームシアター京都でのホール初公演となる「Sound Around 001」では、多彩なゲストを招きつつ、きっと二人はまたしてもぞんぶんに自らの身体を駆使して、「作曲」への、「演奏」への、つまり「音楽」への、私たちの認識を揺るがしてくれることだろう。もちろん、あくまでもジョイフルに。

■プロフィール

いまいけぷろじェくと／Imaike Project



作曲家兼パフォーマーの今村俊博と池田萌によるユニット。「身体」に着目し、生での体験を重視し、「音楽」を再考する試みを続けている。2014年から続けている主催公演は東京・名古屋で開催。ジャンルに限定されない境界横断を目指して、作曲家に限らず、コンテンポラリーダンサーや劇作家に書き下ろし作品を委嘱するほか、ダンサー・俳優をゲストに招くなど意欲的な活動を続けている。これまでにトーキョーワンダーサイト（現 TOKAS）オープンサイト 2016-17 参加企画に選出（第5回東京公演）。サウンドパフォーマンス・プラットフォーム 2018（愛知県芸術劇場）、ホリデー・パフォーマンス Vol.4（ロームシアター京都）等に出演。

【参考動画（過去の公演より）】

[池田萌作曲：いちご香るふんわりブッセ/うさぎのまくら クリーム金時](#)

[岩渕貞太作曲：身体奏法/stick](#)

[松平頼暁作曲：Why not?](#)

[藤元高輝作曲：そぼろ](#)

今村俊博／Toshihiro Imamura

1990年大阪府生まれ。作曲家・パフォーマー。東京藝術大学大学院美術研究科修了。作曲を井上昌彦、川島素晴、古川聖の各氏に師事。第6回JFC作曲賞入選。「いまいけぷろじェくと」ほか、藤元高輝とのパフォーマンス・デュオ「s.b.r.」メンバー。「数える／差異／身体」をテーマに創作活動を展開。

池田萌／Moe Ikeda

1986年石川県生まれ、大阪府在住。作曲家、パフォーマー。愛知県立芸術大学作曲専攻卒業。IAMAS(情報 科学芸術大学院大学)メディア表現研究科修了。日本福祉大学福祉経営学部（通信教育）在学中。第33回現音作曲新人賞入選。作曲を鈴木敬、鈴木英史、小林聡、寺井尚行、三輪眞弘の各氏に師事。主な作品は、「演奏家の選択」のルールに従ってその場で音楽を生成する「選択音楽」シリーズなど。

長井 短／Mijika Nagai



演劇活動と並行してモデルとしても活動する「演劇モデル」と称し、雑誌、舞台、バラエティ番組、テレビドラマ、映画など幅広く活躍中。ドラマ「賭ケグルイ双」『書けないッ！？～脚本家 吉丸圭佑の筋書きのない生活～』『家売る女の逆襲』をはじめ、映画「僕の好きな女の子」、舞台 KERA×CROSS 第2弾「グッドバイ」、「照くん、カミってる」などに出演。文章も人気があり、エッセイストとして執筆活動も行っている。

山下 残／Zan Yamashita



振付家・ダンサー。1970年、大阪府生まれ。10代後半からダンスを始める。振付の方法論や空間への仕掛けをゲームのように制約として用い、社会的な要素としての個々人の身体を、作品を通して解放させる取り組みを行っている。代表作に、100ページの本を配り観客がページをめくりながら本と舞台を交互に見る「そこに書いてある」、スクリーンに映写される〈すう・はく〉の呼吸の記号と俳句から引用されたテキストを身体とリンクさせる「せきをしてもひとり」などがある。

茂山 千之丞／Sennojo Shigeyama



大蔵流狂言師。1983年生まれ。父・茂山あきらおよび祖父・二世茂山千之丞師事。1986年『魔法使いの弟子』（NOHO劇団）で初舞台。作・演出を手掛けるコント公演「ヒャクマンベン」、100年後の古典を目指す新作狂言の会「新作“純”狂言集マリコウジ」を定期的に行う。「バイリンガル狂言」のほか、オペラ演出や現代劇への出演などでも活動中。2018年12月三世茂山千之丞を襲名。2019年第37回京都府文化賞奨励賞受賞。

佐々木 敦／Atsushi Sasaki



音楽レーベル HEADZ 主宰。文学ムック「ことばと」編集長。芸術文化の複数のジャンルで執筆、言論活動を行う。著書多数。近著に『それを小説と呼ぶ』『これは小説ではない』『私は小説である』『批評王』『小さな演劇の大きさについて』『この映画を視ているのは誰か？』など。

■公演情報

公演名：Sound Around 001

日時：2021年7月17日(土) 18:00 開演(17:30 開場)

2021年7月18日(日) 16:00 開演(15:30 開場)

(上演時間：約2時間半 ※アフタートーク含む)

会場：ロームシアター京都 ノースホール

出演(ホスト)：いまいけぷろじェくと〈今村俊博、池田萌〉

共演(ゲスト)：17日…長井短(演劇モデル)

18日…山下残(振付家・ダンサー)、茂山千之丞(狂言師)

トークゲスト：佐々木敦(思想家) ※両日

プログラム(※曲目・曲順が変更になる可能性があります)

■17日

鈴木治行：口々の言葉(今村・池田)

池田萌：いちご香るふんわりブッセ/うさぎのまくら クリーム金時(長井・池田)

山下残：タイトル未定[新作](今村・池田)

今村俊博：連鎖(長井)

かしましげみつ：声がきこえる(長井・今村)

松平頼暁：Why not?(全員)

藤元高輝：そばろ(全員)

今村俊博：数える人Ⅹ[新作](長井・池田)

池田萌：いいのに[新作](長井・今村)

岩渕貞太：身体奏法/stick[2017](今村・池田)

■18日

鈴木治行：口々の言葉(今村・池田)

池田萌：いちご香るふんわりブッセ/うさぎのまくら クリーム金時(茂山・今村)

山下残：タイトル未定[新作](今村・池田)

今村俊博：きのう、きょう、あした(山下・池田)

松平頼暁：Why not?(全員)

池田萌：選択音楽 No.03 あるいは どんつきのきつつき(全員)

藤元高輝：そばろ(山下・茂山・池田)

今村俊博：数える人Ⅸ[新作](茂山)

池田萌：ピアニストでないひとのためのピアノ・コンチェルト群[新作](山下・池田)

岩渕貞太：身体奏法/stick[2017](今村・池田)

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

チケット料金（全席自由）：

一般 2,500 円、ユース(25 歳以下)1,500 円、18 歳以下 1,000 円、

一般セット券 4,000 円、ユースセット券 2,500 円

※販売中

チケット取扱：

■オンラインチケット 24 時間購入可 ※要事前登録（無料）

<https://www.e-get.jp/kyoto/pt/>

■ロームシアター京都 チケットカウンター

TEL.075-746-3201 （窓口・電話とも 10:00～19:00／年中無休 ※臨時休館日を除く）

■京都コンサートホール チケットカウンター TEL.075-711-3231

（窓口・電話とも 10:00～17:00／第 1・3 月曜日休館 ※休日の場合は翌日）

ほか、チケットぴあ、e+（イープラス）でも取扱いあり

問合せ先：ロームシアター京都チケットカウンター TEL.075-746-3201